

長岡宮跡出土の緑釉唾壺について

—唾 壺 集 成—

石 尾 政 信

1. はじめに

昭和60年秋に、京都府向日市寺戸町西ノ段(天狗塚)において、向日町競輪場の改修に伴う発掘調査を実施した。この調査で、土坑から横転した緑釉唾壺が釘と共に出土した。

調査地は、長岡宮西方官衙地区の北辺にあたり、宮城西端の西一坊(西大宮)大路推定中軸線から30～50m東側に位置する。長岡宮域内で最も西方の調査である。

調査の概要は以下のとおりである。検出された遺構は、長岡京期のものと、近世～近代の地割溝がある。長岡京期の遺構は、東西溝(SD16401)・掘立柱建物跡(SB16406)と雨落ち溝とおもわれる東西溝(SD16408)・柵列(SA16405)・楕円形土坑(SK16403)・長方形土坑(SK16409)がある。柵列は南側に2か所の柱掘形があり、掘立柱建物の可能性がある。SA16405の柱掘形が掘り込まれた黒灰色土層上面から、軒瓦・須恵器・土師器が多量に出土している。この黒灰色土層は、下層の蛇行した溝(SD16410)を埋めた後、整地のために置かれたものと考えられる。SK16403とSK16409の西端がわずかに黒灰色土層にかかるが、土坑内には黒灰色土はみられない。2か所の土坑は、黒灰色土層が置かれたのと同時期に埋められたものであろう。SK16403からは、須恵器・土師器が出土しており、いずれも長岡京期としてよいものである。幅0.9m・長さ1m以上の長方形土坑(SK16409)から、横転した状態で緑釉唾壺が発見された。唾壺に隣接して、直立した2本の釘が頭部を下にして検出されたことから、木櫃状のものに入っていた可能性が高い。唾壺の漏斗状口縁の一部は、遺構検出作業中に瓦や土器類と共に見つかった。土器類は、長岡京期に属するものである。(長岡宮跡第164次発掘調査概要は、「京都府遺跡調査概報」第20冊 1986年3月発行を参照して下さい。)

緑釉唾壺は、漏斗状口縁端部を欠くが、残存高8.3cm・最大胴径9.2cm・底径5.5cmある。体部上半の肩部に最大径があり、8世紀代の施釉陶器小型壺に外上方に大きく開く漏斗状口縁部を取り付けた形態をしている。口縁部内外面および体部外面に細かくヘラミガキを行い、全面にやや黄色の淡緑色に発色した釉が施されている。緻密な灰白色の胎土で、焼成が甘くやや軟質である。

長岡宮出土の緑釉唾壺が、これまでに知られている日本出土の唾壺と比較して、胴部に特徴があることから、唾壺の資料の収集に務め、これまでに収集した資料をもとに各地出土の唾壺の比較を行ってみたい。

2. 日本出土の唾壺

日本出土の唾壺の資料は、収集の途中であり充分ではないが、これまで集まったものは、窯跡出土のものを含めると30例以上になる(平安京関係の資料の増加は確実)。唾壺には、緑釉・灰釉・無釉陶器、須恵器、青磁などがある。出土地名(遺跡)は表1・図1の様になり、唾壺の実測図は図2にかかげた。以下に出土地と遺物について記述する。

(1)胆沢城 昭和58年度の政庁地区東方官衙地区の調査では、掘立柱建物群の南半地域と、低湿地を抱える北半地域に大別され、遺物は土坑内出土のもの、建物掘形の埋土中のものがあるが、多くが北半低湿地の遺物包含層から出土している。遺物包含層は時間差のない堆積であるという。そして、北半低湿地遺物包含層と南半地域の土坑から、承和10年(843)2月の解文、嘉祥元年(848)2月の具注曆断簡などの漆紙文書が出土しており、上限を9世紀後半を遡らないものと想定しておられる。そこでは、多数の緑釉・灰釉や輸入陶磁器が出土しており、その中に灰釉唾壺の口縁部片がある。^(注1)

(2)国府台遺跡 この遺跡は、下総国分僧寺・尼寺の所在する国分台地と通称される標高約20mの台地上にある。国分尼寺に北接する学校法人和洋女子学園国分分校地の、昭和47年度の調査で住居跡群が発見されている。住居跡からは、多量の瓦類、土師器、須恵器、緑釉、灰釉、墨書土器、金属器等が出土している。出土遺物から、住居跡群は9～11世紀とされる。この住居跡のひとつ(第6号住居跡)から、カマドに接する様にして口縁部を欠く緑釉唾壺が出土している。この唾壺は、残存高6.8cm・最大胴径9.5cm・底径7.5cmある。胴部中央付近に最大径があり、^(注2)圧縮された球形ではほぼ均等にふくらむ形態である。胎土は灰色で精良、焼成も良好で硬質の素地に淡青緑色の釉が施されている。

(3)杉森遺跡 現在は地名から染地遺跡と称されている。昭和45年の調査で、住居跡群が発見されている。このうち6.3×6.3mの隅丸方形の第10住居跡から、金環、土師器甕・杯、^(注3)須恵器甕と共に緑釉唾壺が出土している。唾壺は2片あり、図面上で復原されており底径7.6cmとある。胎土は粒子の細かい白っぽい精選された土で、焼成は軟かく、釉は僅かに青味をおびた緑色で、こまかい鹿の子模様に施されているという。胴部の中央よりやや下に最大径があり、胴部はいわゆるナデ肩で安定感のあるふくらみ方をしている。

(4)武蔵国分寺跡 よく知られた緑釉唾壺があるが、調査で出土したものではなく、採集した品といわれる。^(注4)唾壺は、口縁部を欠き残存高9.6cm・最大胴径12.2cm・底径9.6cmある。

胎土は灰白色で、焼成も良好で硬質の素地に緑青色ぎみの釉が全体に施されて貫入がみられる。胴部中央よりやや下に最大径があり、少しナデ肩で安定感のあるふくらみ方をしている。器壁は厚い。

(5)榎垣外遺跡 掘立柱建物群等があり官衙の可能性が指摘されている。昭和55年の調査で住居跡群が検出され、隅丸方形の第6住居跡から、土師器、須恵器、灰釉・緑釉陶器と共に口縁部を欠く緑釉唾壺が出土している。^(注5) 唾壺は、残存高6.3cm・最大胴径9.7cm・底径7.4cmある。硬質の暗灰色の素地に、淡緑色の釉が施され貫入がみられるという。胴部中央よりやや下に最大径があり、ややナデ肩ぎみの圧縮された球形状である。

(6)恒川遺跡 天竜川右岸の段丘上で、天竜川にそそぐ南大島川形成の扇状地先端部に接するところに広がる弥生から平安時代にかけての複合遺跡である。^(注6) 奈良～平安時代の建物群が検出されており、官衙に関連するものと考えられている。ここでは、和同開珎銀銭や鈔帯、木簡や多種類の木製品、硯、緑釉陶器などが出土している。緑釉陶器のなかに唾壺と推定される底部片がある。^(注7)

(7)遠江清ヶ谷古窯跡群 静岡県の中西部、磐田原台地の東方の低丘陵、小笠台地(丘陵)の最南西部に位置する大須賀町に瓦・須恵器・灰釉陶器を生産した清ヶ谷古窯跡群があり、そのうちの宮東窯支群から唾壺と推定される灰釉陶器の体部片が出土している。この窯跡群の灰釉陶器の中では最も古い第一段階(10世紀中葉)に位置づけられている。^(注8)

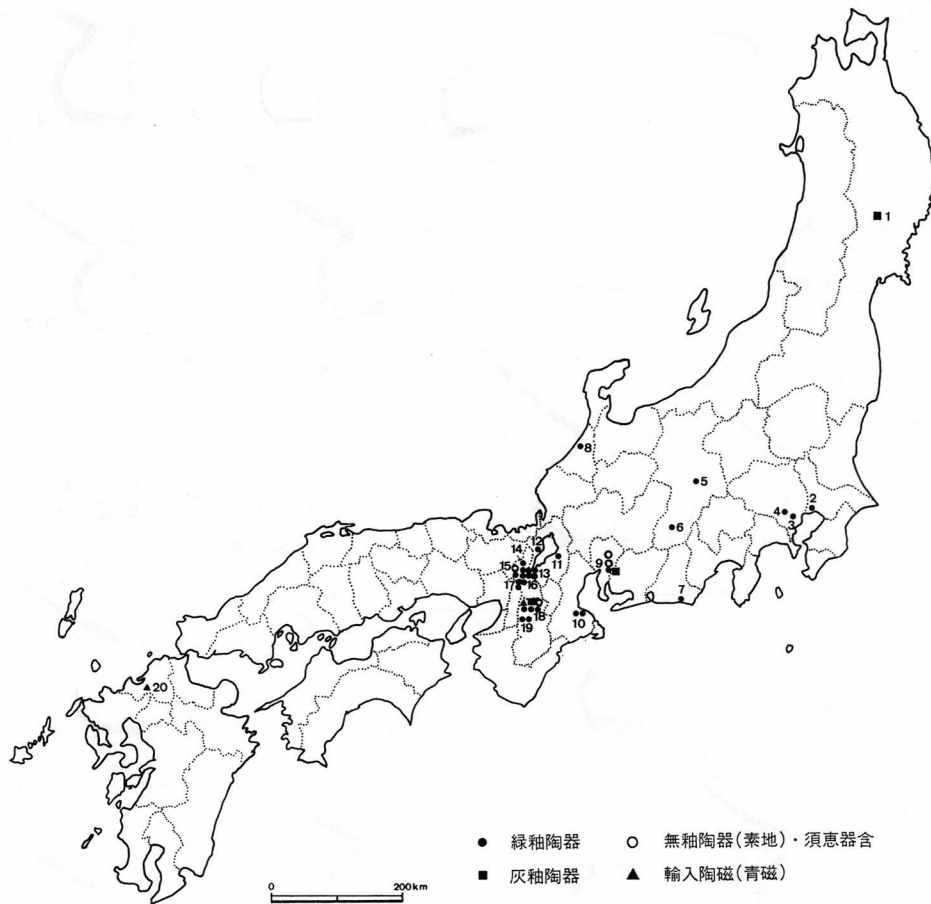
(8)戸水C遺跡 金沢平野北東部の沖積地に位置する。昭和53～57年に調査が行われた。弥生・古墳時代から奈良・平安・鎌倉・室町時代の複合遺跡である。多数の灰釉・緑釉陶器や墨書土器等が出土しており、その中に緑釉唾壺と推定されている体部片がある。^(注9) 唾壺は残存高6.4cm・最大胴径10.6cm・底径7.8cmとなっている。灰白色の硬質の素地に淡い緑釉が内外面に施されているという。胴部中央より下に最大径があり、いわゆるナデ肩の胴部を持つものである。

(9)猿投古窯跡群 愛知県の猿投山東南麓に広がるこの窯跡群からは多くの唾壺が出土している。(9-1)は完形品である。^(注10) 球形に近い胴部の中央に最大径がある体部に、漏斗状の口縁部が取り付けく。器壁の厚い須恵器である。(9-2)は、口縁部と、胴部下半に最大径のある体部片が図面上で復原されている。^(注11) (9-3)は、口縁部と胴部上半と下半からなり、胴部の中央に最大径がある球形の胴部に図面上で復原されている。^(注12) (9-4)は、口縁部と胴部からなり、胴部の中央に最大径があり、球形によく張った形をしている。^(注13) (9-5)は、口縁部と胴部であり、胴部下半に最大径のある形をしている。^(注14) (7-6)は、唾壺の可能性のある胴部片である。^(注15)

(10)斎宮跡 第44次調査(鍛冶山地区)で、土壇より多数の土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器

表1 唾壺出土地名表

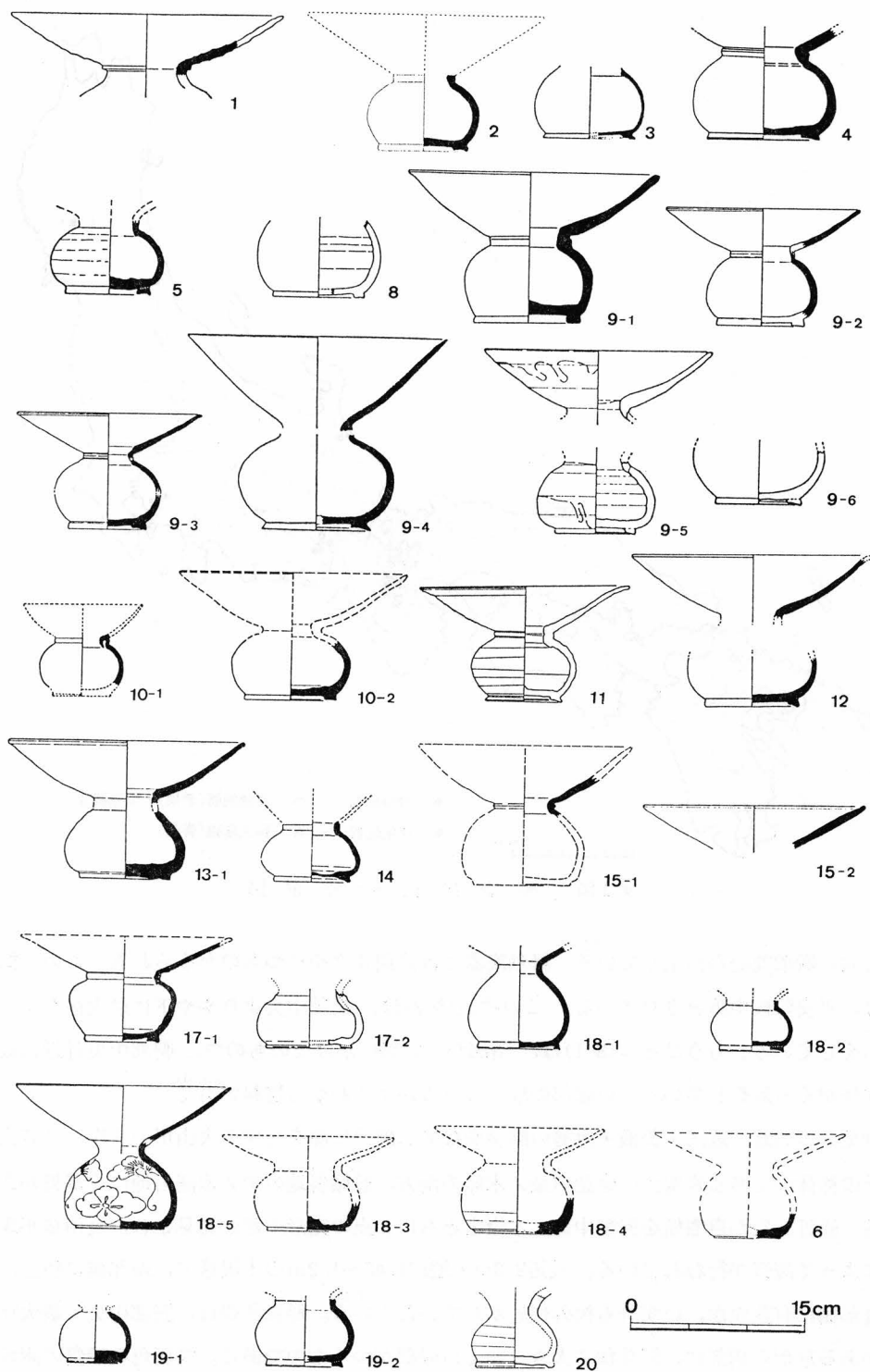
	遺 跡 名	所 在 地	遺 跡 分 類	備 考
1	胆 沢 城 跡	岩手県水沢市佐倉河	官 衙	灰釉 口縁部
2	国 分 台 遺 跡	千葉県市川市国分町	(集落)	緑釉 口縁部欠
3	杉 森 遺 跡	東京都調布市染地二丁目	集 落	緑釉 体部と頸部
4	武 蔵 国 分 寺	東京都国分寺市	寺 院	緑釉 口縁部欠
5	榎 垣 外 遺 跡	長野県岡谷市長池	(官衙)	緑釉 口縁部欠
6	恒 川 遺 跡	長野県飯田市座光寺	(官衙)	緑釉 体部下半
7	宮 東 窯 跡	静岡県小笠郡小須賀町	窯跡 (清ヶ谷窯)	灰釉 体部
8	戸 水 C 遺 跡	石川県金沢市戸水町	(官衙)	緑釉 体部
9-1	東 山 窯 跡	愛知県名古屋市中千種区日和町	窯 跡 (猿投窯)	須恵器 完形(一部欠)
2	亀ヶ洞 //	愛知県名古屋市中緑区鳴海町	//	素地 口縁部と体部
3	棧 敷 //	愛知県豊前市沓掛	//	口縁部と体部
4	熊ノ前 //	愛知県名古屋市中緑区鳴海町	//	緑釉 口縁部と体部
5	黒笹90号 //	愛知県西加茂郡三好町	//	灰釉 口縁部と体部
6	黒笹89号 //	愛知県西加茂郡三好町	//	体部
10-1	斎 宮 跡	三重県多気郡明和町	官 衙	緑釉 体部
2	//	//	//	緑釉 体部
11	梨ノ木遺跡	滋賀県犬上郡多賀町梨ノ木	古 墓	緑釉 完形(一部欠)
12	鴨 遺 跡	滋賀県高島郡高島町鴨	(官衙)	緑釉 口縁部と体部
13-1	平 安 京 跡	京都市下京区西大路七条	都 城 (西市)	緑釉 頸部欠
2	//	// 中京区西ノ京中御門東町	// (右京二条二坊)	緑釉 口縁部欠
3	//	// 中京区富小路夷川上ル	// (左京二条四坊)	緑釉 口縁部欠
4	//	// 下京区塩小路通新町東入ル	// (左京八条三坊)	緑釉 口縁部と体部
5	//	// 北区大將軍坂田町他	// (右京一条三坊)	緑釉 頸部
14	北 野 麿 寺	京都市北区白梅町	寺 院	緑釉 口縁部欠
15-1	小 塩 4 号 窯 跡	京都市西京区大原野小塩町	窯 跡	素地 口縁～頸部
2	石 作 窯 跡	// 石作町	窯 跡	緑釉 口縁部
16	修 理 式 遺 跡	京都府向日市寺戸町縄手	(集落)	緑釉 頸部
17-1	長 岡 宮 跡	京都府向日市寺戸町西ノ段	都城	緑釉 口縁端部欠
2	長 岡 京 跡	// 上植野町太田	// (左京三条二坊)	緑釉 口縁部欠
18-1	平 城 宮 跡	奈良県奈良市佐紀町他	都城 (東院)	青磁 口縁部欠
2	//	//	//	緑釉 口縁部欠
3	//	//	// (馬寮)	緑釉 体部下半
4	//	//	//	灰釉 体部下半
5	平 城 京 跡	奈良市法華寺東町	都城 (東三坊大路)	素地 口縁部と体部
6	//	//	//	緑釉 体部下半
19-1	薬 師 寺	奈良県奈良市西ノ京	寺 院	緑釉 口縁部欠
2	//	//	//	緑釉 体部
20	大 宰 府 跡	福岡県太宰府市	官 衙	青磁 口縁部欠



第1図 唾壺出土地分布図

と共に緑釉唾壺が出土している。^(注16) 緑釉陶器には陰刻花文を持つものがみられる。この遺構は、平安時代中葉とされている。この唾壺(8-2)は、胴部中央よりやや下に最大径がくる形をしている。もうひとつ(8-1)は、頸部から胴部にかけてのもので、胴部中央付近に最大径がくる形をしている。口縁部の取り付け方がよくわかる資料である。^(注17)

(11) 梨ノ木遺跡 近江・美濃・伊勢の国境をなす三国岳に源を発する犬山川の右岸、多賀大社の神体山である青竜山の東麓の梨ノ木峠の南方、緩傾斜地の梨ノ木開拓地に古墓群がある。原哲三氏が自宅横を掘削中に、木炭とともに2点の完形土器が発見され、丸山竜平氏によって調査が行われている。長辺2.8m・短辺1.45～1.2mの木炭槨で、頭部側に痰壺、脚部側に有蓋壺が、いずれも棺外に置かれていたという。^(注18) 緑釉唾壺は、胴部中央に最大径がある球形の胴部に、漏斗状に大きく開く口縁部がつくものである。淡灰色の硬質の素地に、わずかに濃緑色を呈する釉が施されている。有蓋壺も硬質で同色の釉が全面に施され



第2図 出土唾壺一覧 (ただし9-4をのぞく)

これらの唾壺は各々報告書等によった、また担当者御好意で
未発表資料を使用させていただいた。(一部筆者加筆)

ている。

(12)鴨遺跡 琵琶湖に突き出した、安曇川が形成した沖積平野の南端で、鴨川に隣接した遺跡である。銅印や木沓をはじめ多数の木製品・木簡、皇朝十二銭のうち7種、墨書土器、^(注19)緑釉・灰釉陶器などが出土している。トレンチ10の遺物包含層から、一気に廃棄されたような状態で、ほぼ完形に近い土器が多量に出土しているという。土師器・須恵器、黒色土器、^(注20)緑釉・無釉・灰釉陶器があり、この中に緑釉唾壺の口縁部と胴部下半がある。図面から、胴部はナデ肩で、中央よりやや下に最大径がくるものとおもわれる。トレンチの最下層から『貞観十五年九月十日』(873)と書かれた長大な木簡が出土している。

(13)平安京跡 平安京では、緑釉唾壺の出土が文献等でわかるものが5例ある。公表されていないものを含めるとこの倍以上にのぼるであろう。(13-1)は、頸部を欠くが完形に復原されている。説明文によれば、口径20.4cm・復原高12cmである。大きく開く漏斗状の口縁部と、胴部下半に最大径がある胴部からなる。少し凹んだ平底を持ち、口縁部内外面と外面全体をヘラ磨きされ、釉は全体にかけられているが暗緑色と淡緑色の斑状に変色しており、一部は銀化しているという。^(注21)他に4点ある。1点は写真図版でみると、口縁部を欠いた胴部である。胴部が半球形によく張った、胴部中央よりやや下に最大径のある形のようなものである。^(注22)もう1点も、口縁部を欠き、前者に似た形をしている。^(注23)また、日本生命所有地(現新阪急ホテル)の調査で、南北溝および遺物包含層(第3層)から唾壺が出土している。第3層出土の唾壺は、いずれも硬陶の緑釉唾壺で口縁部から体部上半のものと体部下半のものがある。前者は外面ヘラミガキである。後者は体部のヘラミガキがみられず、高台部はヘラで削り、底に糸切り痕が残るという。平安時代第Ⅰ期のものとされている。^(注24)そして、府立山城高校の調査で、大規模な苑池遺構から、多数の土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器が出土している。その中に緑釉陶器の頸部片があり唾壺と推定されている。この苑池は、出土遺物から9世紀後半に埋められたと考えられている。^(注25)11-1以外の唾壺は割愛している。

(14)北野廃寺 第9次調査で、土坑内から口縁部を欠く緑釉唾壺が出土している。この土坑には、多量の土師器、黒色土器、須恵器、緑釉・灰釉陶器がある。この土器群は、9世紀末から10世紀前半頃と考えられている。唾壺は、残存高5cmで、半円球形を呈する胴部下半に最大径がある形をしている。頸部は直立し、底部に幅の広い低い高台が付き、高台端は外傾するという。胴部は丁寧にヘラミガキし、内面はロクロナデしている。底部外面に、部分的に糸切り痕をとどめる。^(注26)内外面に淡緑色の薄い釉を施し、密で硬質である。

(15)大原野窯跡群 ひとつは、小塩4号窯から無釉の唾壺の口縁部から頸部片が(15-1)、もうひとつは、石作古窯から口縁部が出土している(15-2)。前者は、試掘調査で発見されたもので、窯本体は検出されていないが、炭・灰・窯壁片等を含む包含層から、緑釉・灰釉

陶器、窯道具などが出土している。唾壺15-1は、口縁部が若干内湾し、頸部はゆるやかに屈曲し外面に三角形の凸帯をつける。口縁部・頸部内外面はロクロ調整、口縁部内外面は密なヘラミガキ調整、頸部外面はヘラで成形しているという。硬陶である。後者は、標高約150mの丘陵尾根に所在し、南北に約8mの間隔をおいて2基発見され、焼土面の形状から三角窯と推定されている窯跡から、碗・皿と共に見つかった。この窯跡出土の遺物は、亀岡市篠窯跡群の前山2・3号窯のものに比較して、概して丁寧であるという。陰刻花文の施された碗・皿がある。

(16)修理式遺跡 長岡京の北方約500mに位置する弥生～古墳時代を主とする遺跡である。この遺跡の南辺部にあたる場所で、遺物包含層から唾壺と推定される緑釉陶器の頸部片が出土している。小片のため図は割愛した。

(17)長岡京跡 三条大路に隣接する、長岡京左京第88次調査で、口縁部を欠く緑釉唾壺が出土している。遺構にともなうものではなく、長岡京期の土師器・須恵器、瓦器碗や白磁碗等の中世陶器と共に遺物包含層から出土している。この唾壺(17-2)は、残存高4.9cmの半球形の胴部の中央よりやや下に最大径がある形をしている。肩部がわずかに段状になる。精良な胎土で、焼成はやや甘く、淡緑色の釉が施されている。そして、長岡宮跡第164次調査のものと合せて2点の唾壺が長岡京跡から出土している。

(18)平城京跡 平城宮・京関係では、平城宮東院出土の中国越州産の青磁唾壺(18-1)、緑釉唾壺(18-2)、東三坊大路東側溝出土の陰刻花文のある唾壺(18-5)がよく知られている。青磁唾壺は、底部は削り出しの蛇の目高台で、オリーブ色の釉が内外面にかかる。典型的なナデ肩で安定感のある胴部で、胴部下半に最大径がある形をしている。緑釉唾壺は、底部は幅の広い貼り付け高台で、胎土は淡灰色で硬質である。ややナデ肩で半球形の胴部のやや下に最大径のある形をしている。陰刻花文のある唾壺は、底部をわずかに削り高台に似せ、ナデ肩で安定感のある胴部と、口縁部とがある。胴部下半に最大径のある形をしている。この東三坊大路東側溝の年代は、出土遺物の銅銭から、上層を9世紀後半、中・上層の下限を10世紀にそれぞれ想定されている。そして、溝の上・中・下層から出土した土器はよく似ており、9世紀後半を中心とした土器の実態を示すものとみられている。これら

のほかに、平城宮馬寮地区から唾壺と推定される、緑釉(18-3)・灰釉(18-4)の底部片が出土している。東三坊大路からも唾壺と推定される底部片が出土している。

(19)薬師寺 薬師寺西僧房跡の調査で緑釉唾壺(17-1)が出土している。この唾壺は口縁部の欠損後、縁を平らに磨いており、用途をかえての使用がうかがわれるという。ナデ肩で安定感のある胴部下半に最大径がある形をしている。もうひとつこの調査以前に出土した緑釉唾壺がある(19-2)。この唾壺は、胴部の中央よりやや下に最大径がある形をしている。

②大宰府跡 第76次調査で、ほぼ真南北の溝の上層から口縁部を欠く青磁唾壺が出土して^(注40)いる。この上層埋土中には、平安時代後半代・11世紀中頃までの遺物を含むとされている。この唾壺は、越州窯系青磁で、低い高台の端部に7個の目跡があり、体部の中までヘラ削りされており、内外面ともに淡青色の釉が施され、胎土は暗灰色を呈し緻密であるという。あまり張りのないナデ肩の胴部の下半に最大径のある形をしている。

唾壺の出土する遺跡は、平城京・平安京などの都城、地方官衙、寺院に関連するもの、集落、墳墓、窯跡の6種類に分けられよう。このうち、窯跡は生産遺跡であり性格を異にする。実際に使用した遺跡でみると、都城、地方官衙、寺院関係の遺跡に集中することがわかる(国分台遺跡は、国分寺・尼寺に近いことから、一般的な集落でない可能性が高い)。特に平城京・平安京を中心とした畿内で多く見つかっている。このことから、唾壺は一部の限られた人が用いていたことがうかがわれる。また、梨ノ木遺跡のように古墓に埋納される例があり注目される。

唾壺がどのように使用されていたかは不明である。唾壺の名のとおり「つばはき」として使用したとは断定できない。中国では、現代でも室内で同類のもの(痰壺・痰盂)が使用されており、形や材質には種々あるようだ。

3. 唾壺の変遷

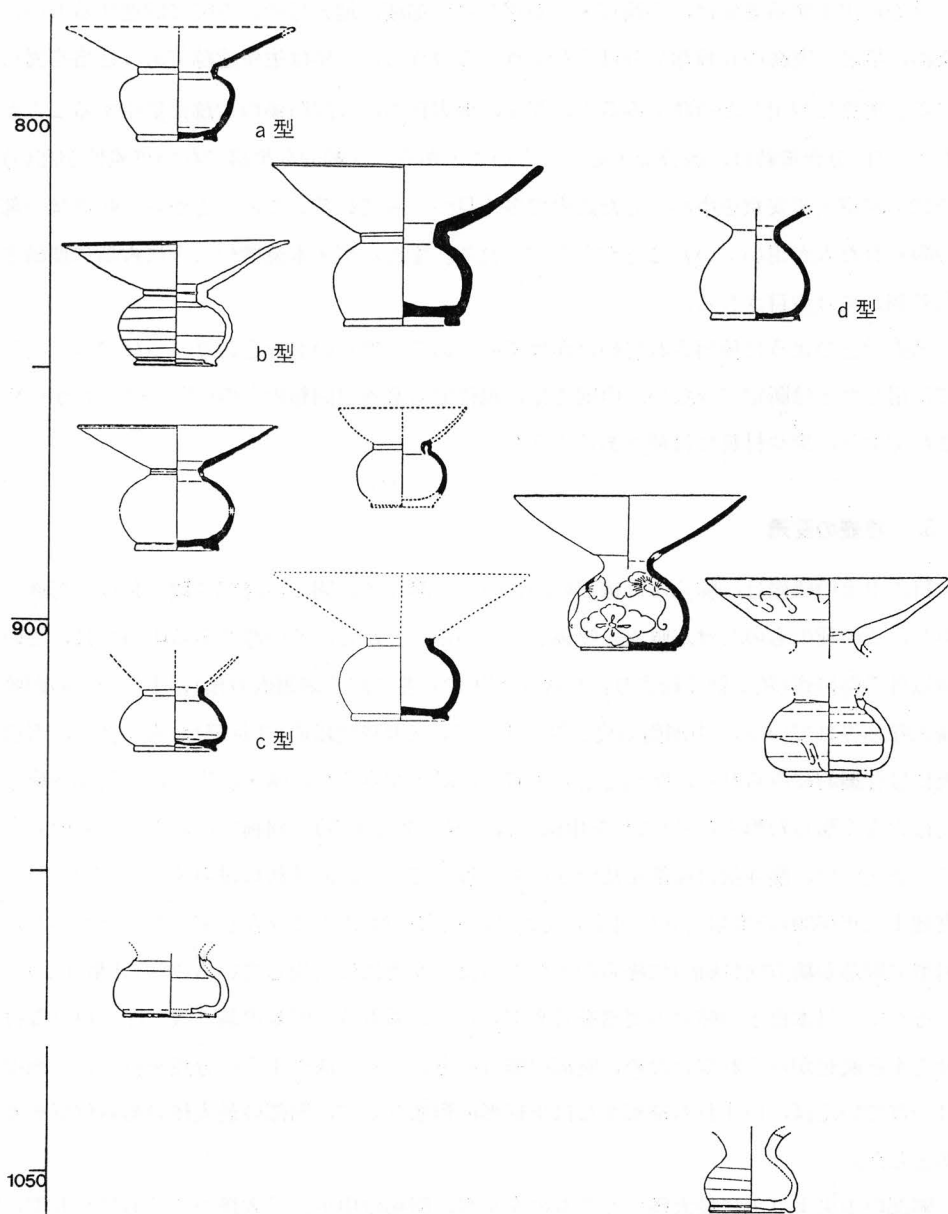
日本出土の唾壺は、膨らんだ球形の胴(体)部に漏斗状に開く口縁部を取り付けた形態であり、この種のものだけが唾壺と呼称されている。しかし、その源である中国では、この種以外の盤口壺(頸が細く締まり、口縁が盤状に立ちあがる細頸壺の類)の小型のものが唾壺と呼称されている。「中国陶磁史」等によれば、三国時代以前(3世紀)から存在し、晋以後には普遍的にみられる。時代とともに若干の変化がみられ、隋・唐代には、胴部が横方向に大きく膨らむ形となる(これを中国では唾壺Ⅰ型とする)。同種で、蓋の付くものもある。唐代には、漏斗状口縁部を持つものも出現してくる。漏斗状口縁の唾壺(唾壺Ⅱ型)は、貞観十三年(639)の墓誌と共に出土しており、初唐にはすでに存在していたことがわかる。^(注41)同型で胴部が横方向(球形)に膨らむ形のもは、晩唐には出現している(唾壺Ⅱ型Ⅱ式)。^(注42)

そこで、日本出土の唾壺の変遷を考えてみたいとおもう。唾壺の漏斗状に開く口縁部は、ほとんど変化がみられないため、胴部の膨らみ方によって次のように分類を行った。胴部は一言でいえば、いずれも球形または半球形の形態なので、胴部の最大径のある位置を基準とした。

胴部の中央より上に最大径のくるものをa型、胴部の中央に最大径のくるものをb型、胴部の下半分に最大径のくるものをc型、同じく胴部の下半分に最大径がくるが胴部が

「ナデ肩」のものをd型とした。しかし、各々の中間的なものがあり、筆者の独断によるところが大きい。

a型は、長岡宮跡出土(17-1)に代表され、8世紀の彩釉陶器の小型壺に漏斗状口縁部を取りつけた形である。そのため、口頸部が広いことも特徴にあげ得る。そして、出土した遺構、関連する遺構の出土遺物が長岡京期に属する。これらのことから、a型の年代は、



第3図 唾壺変遷図案

8世紀末～9世紀初にあたと考えている。他に出土例をみない。

b型は、胴部が球形になったもの、そのため最大径が中心部にある。a型から発展したものであろう。この代表として、梨ノ木遺跡出土(11)がある。これに酷似した胴部をもつ越州青磁唾壺が^(注43)大和文華館にある。その唾壺は唐代とされ、暗灰色ぎみの素地に薄い黄灰色の釉がかかり、古い様相を示すものである。^(注44)a・b型の中間的なものに東山窯跡出土(9-1)がある。b型の年代は、9世紀中頃と考えている。出土例は少ない。

c型は、胴部が圧縮され、最大径が胴部の下半分にくるもので、このためややナデ肩となる。d型の影響が考えられる。この中には、胴部の中央よりやや下に最大径があり、わずかにナデ肩となるものと、胴部の下半分に最大径があり、ナデ肩で半球形の胴部となるものがある。前者から後者へ変化したものと考えられる。前者の代表として国府台遺跡出土(2)・武蔵国分寺出土(4)が、後者の代表として北野廃寺出土(14)・榎垣外遺跡出土(5)などがある。この形態のものが最も多い。c型の年代は、9世紀後半～10・11世紀と考えている。

d型は、輸入陶磁器にみられる特徴であろう。先に記した貞観十三年の墓誌と共伴した唾壺の胴部もこれと酷似した形をしている。^(注45)この特徴をよく残すものに、平城京東三坊大路東側溝出土(18-5)がある。また、杉森遺跡出土(3)・戸水C遺跡出土(6)も(8-5)によく似た胴形をしている。d型の平城宮跡東院出土青磁唾壺(16-1)は、9世紀前半とされている。

唾壺の出土した遺構や共伴した遺物についての検討が不十分であり、早急な考えとは思いますが、唾壺の形態変化を以上のように考えている(a型-b型-c型)。

4. おわりに

再度、前述の事をまとめておきたい。初唐に成立した口縁部が漏斗状に開く唾壺は、晩唐には横に大きく膨らみ、圧縮された半球形へと変化したものが出現している。この型式以前の唾壺は、日本では出土していない。

日本でこの型式以前の唾壺が受け入れられない原因は明確ではないが、それ以前のものは小型の長頸壺の形であるため、従来から日本で製作されていた壺と類似するためであろう。また、唾壺と呼称される「壺」が墓に埋納される仮器や一部の限られた人のために製作されていたことによるのであろう。それが、漏斗状に開く型式(唾壺Ⅱ型、Ⅰ式とⅡ式がある)になり、特殊な形をした壺と見えた遣唐使等によって、その型式のみが日本に請来され、当時日本で製作されていた小型壺に漏斗状口縁部を取り付けることによって口縁部の開く唾壺が成立したのであろう。そして球形の胴部へと発展し、半球形の胴部へと変化したものと考えられる。ただし、それぞれが並存していたことは充分考えられる。中国においても、初唐に出現した唾壺Ⅱ型Ⅰ式の胴部はナデ肩であったが、晩唐には横方向に

膨らむ半球形のものが現われ、両者は並存していたとおもわれる。また、Ⅰ型とⅡ型も並存していたよう^(注46)だ。

日本の文献にみえる唾壺の記載には、延喜式卷十七内匠寮に「賀茂初斎并野宮装 中略 銀唾壺二口^{口径八寸五分}。銀小七十八両。炭二斗。和炭一石五斗。油一合五勺。鉄半延。長功五人。中功六人。短功七人。」と唾壺の製作についてのもの、小右記・寛仁二年六月廿日「前略 御鏡并筥、銀臺御泔杯并臺、御硯筥一具、火取一具^{銀籠裏}、唾壺并筥 後略」と調度品についてのもの、類聚雜要抄^{二調度}・一御装束に「母屋簾卷上。中略 屏風前立二二階一脚一上屑置唾壺、泔坏等 後略」と調度についてのものなどがある。平安時代には、調度品として用いられた例がわかる。そして、類聚雜要抄記載の「銀唾壺」を基にしたとおもわれる飛香舎・二階棚に銀製唾壺があり、京都御所・清涼殿朝餉の間の二階厨子棚にも銀製唾壺がみ^(注47)られる。また、正倉院には、著名なガラス製唾壺がある。これらの資料も収集中であり、今後機会があればこれらについても考えていきたい。

和洋女子大学寺村光晴氏、国分寺市立郷土資料館星野亮勝氏、東京国立博物館小松大秀氏、栃木県立博物館北口英雄・橋本澄明・上野修一氏、岡谷市教育委員会亀割 均氏、飯田市教育委員会山下誠一氏、奈良国立文化財研究所田辺征夫・巽淳一郎氏、(財)京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏、大和文華館成瀬不二雄氏、多賀町立民俗資料館小富士迪氏、向日市教育委員会渡辺 博氏には資料収集および資料の実見にあたって御指導・協力をいただいた。記して謝意を表します。

また、当調査研究センター福山敏男理事長からは本稿の構想時から完了に至るまで終始有意義な御指導をいただき、松井忠春・引原茂治・土橋 誠・荒川 史調査員の協力があった。

(石尾政信＝当センター調査課調査員)

- 注1 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一「胆沢城東方官衙南地区出土の施釉陶器」『考古学雑誌』第70巻1号 1984
- 注2 寺村光晴・山田友治他『下総国分の遺跡』和洋女子大学 1974
- 注3 青木一美「調布市杉森遺跡の緊急調査」(『文化財の保護』第3号 東京都教育委員会) 1971
- 注4 国分寺市郷土資料館 星野亮勝氏の御教示による。
- 注5 会田 進「榎垣外遺跡」(『長野県史・考古資料編』全1巻(3)主要遺跡(中・南信) (社)長野県史刊行会) 1983 岡谷市教育委員会の御教示による。
- 注6 小林正春「恒川遺跡」(『長野県史・考古資料編』全1巻(3)主要遺跡(中・南信) (社)長野県史刊行会) 1983
- 注7 山下誠一氏の御教示による。

- 注8 守屋雅史「遠江清ヶ谷古窯跡群における灰釉陶の展開」『大阪市立美術館紀要』第四号 大阪市立美術館 1984
- 注9 平田天秋・東国柳史郎『金沢市・戸水C遺跡発掘調査概報』石川県教育委員会 1976
- 注10 『世界考古学大系・日本VI』平凡社 1961 その他
- 注11 坂野和信「日本古代施釉陶器の再検討(1)」『考古学雑誌』第65巻2号 1979
- 注12 注8に同じ
- 注13 『鳴海の緑釉陶器展』(集成館パンフレットNo.66 (財)荒木集成館) 1983
- 注14 『特別展猿投窯～須恵器・瓷器から中世陶へ～』愛知県陶磁資料館 1981
 檜崎彰一・斎藤孝正『愛知県古窯跡群分布調査(Ⅲ)』愛知県教育委員会 1983
- 注15 注11に同じ
- 注16 「第44次調査概要」(『史跡斎宮跡』三重県教育委員会) 1983
- 注17 『斎宮跡史料』三重県教育委員会 1978
- 注18 丸山竜平「多賀町梨ノ木遺跡の木炭櫛」(『滋賀文化財だより』No.3 (財)滋賀県文化財保護協会) 1977
- 注19 丸山竜平・兼康保明『鴨遺跡』高島町教育委員会 1981
- 注20 兼康保明「滋賀県・鴨遺跡出土の陶器」(『研究紀要2』・シンポジウム『平安時代の土器・陶器一各地域の諸様相と今後の課題』の記録)愛知県陶磁資料館 1983
- 注21 『平安京跡発掘資料選』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
- 注22 『史料・京都の歴史』第2巻考古 京都市 1983
- 注23 注19に同じ
- 注24 鈴木廣司・吉川義彦他『平安京左京八条三坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982
- 注25 平良泰久・伊野近富他「平安京跡(右京一条三坊九・十町) 昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』第1分冊 京都府教育委員会) 1981
- 注26 堀内明博『北野麿寺発掘調査概報』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 注27 上村和直・加納敬二「大原野地区の試掘調査」(『京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1983
- 注28 安藤信策・水谷寿克他「篠窯跡群昭和55年度発掘調査」(『埋蔵文化財発掘調査概報』第2分冊 京都府教育委員会) 1981
- 注29 寺島孝一「石作窯跡の発掘調査」『古代文化』第31巻11号 1979
 寺島孝一「畿内の緑釉陶器窯」『考古学ジャーナル』No.211 1982
- 注30 渡辺 博氏の御教示による。
- 注31 渡辺 博「長岡京跡左京第88次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告』第10集 向日市教育委員会) 1983
- 注32 異淳一郎『陶磁(原始・古代編) 日本の美術 No.235』至文堂 1985
- 注33 『埋もれていた奈良の都・平城宮』発掘調査10周年記念 1969
 檜崎彰一編『三彩・緑釉・灰釉』(『陶磁大系 5』平凡社) 1973
- 注34 「1969年度平城宮跡・藤原宮跡発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報』1970
- 注35 高島忠平「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」『考古学雑誌』第57巻1号 1971
 『平城宮跡発掘調査報告VI』では、SD650をA・B様式に分け、9世紀前期と後期としている。唾壺はSD6502Bにはいる。
- 注36 『平城宮発掘調査報告XII』奈良国立文化財研究所 1985
- 注37 異淳一郎氏の御教示による。

- 注38 「薬師寺西僧房地区の調査」『奈良国立文化財研究所年報』 1975
「薬師寺西僧房地区の発掘調査」(『昭和49年度平城宮発掘調査部発掘調査概報』 奈良国立文化財研究所) 1975
- 注39 異淳一郎氏の御教示による。
- 注40 「第76次調査」(『大宰府史跡・昭和56年度発掘調査概要』 九州歴史資料館) 1982
- 注41 中国科学院考古研究所西安研究室『西安郊区隋唐墓』 科学出版社 1966
- 注42 注41に同じ
- 注43 『大和文華館所蔵品図版目録7・中国陶磁』 大和文華館 1977
- 注44 大和文華館次長成瀬不二雄氏の御好意で実見することができた。
- 注45 注41『西安郊区隋唐墓』図版38-2 胴部の膨らみ方と頸部の締めり方に若干の差がみられる。
- 注46 佐藤雅彦・長谷部楽爾編『世界陶磁全集11 隋・唐』 小学館 1976 図版243に青磁唾壺があり、矢部良明氏の解説によれば五代(十世紀)とされる。この唾壺も胴部はナデ肩である。
- 注47 岡田 護『調度 日本の美術3』 至文堂 1966